

# コンピテンシーを育む多国籍の 高校生研修についての実践

－「ウェルビーイング」をテーマに掲げて－

武田素子・和栗夏海

## 1. はじめに

国際交流基金関西国際センター（以下、関西センター）では、1997年の設立以来、海外の日本語教育支援の一環として、海外で日本語を学ぶ学習者に訪日の機会を提供することで日本への理解を一層深め、日本語学習の継続を奨励することを目的とした短期滞在型研修を実施している。海外で日本語を学ぶ多様な背景を持つ学習者のニーズに応えるため、教室の「ウチ」と「ソト」を結ぶ体験交流型活動日本語学習（以下、体験交流活動）と、それを支える自律学習支援を一体化させたコースデザインを大きな柱として研修を実施してきた（熊野ほか 2009）。

今般、国際交流基金（以下、JF）では、日本 ASEAN 友好協力50周年を契機に、日本と ASEAN の次世代の交流促進と人材育成を目的とする包括的な人的交流事業「次世代共創パートナーシップ－文化の WA2.0－」を、今後10年間にわたり実施することとなった<sup>(1)</sup>。関西センターでは、新たな事業目的のもと「次世代の交流促進と人材育成」を目標に、日本語パートナーズが派遣されている中等教育機関からの高校生を対象に2週間程度の訪日研修を実施することとなった。本稿では研修の企画、実施にあたり、どのようなコンセプトを持ち研修をデザインしたのか、コースデザインと活動内容について報告する。

## 2. コースデザインの背景

### 2.1 VUCA な時代に求められる力

21世紀の社会は新しい知識・情報・技術が人間の活動の基盤となる「知識基盤社会」と言われており、グローバル化とテクノロジーの急速な進展によって、社会はこれまでにないスピードで変化し、それに伴い、直面する課題もますます複雑化している。変化の激しい21世紀の社会に対応し、生き抜く力が必要だという考えのもと2000年代に入り OECD（経済協力開発機構）の「キー・コンピテンシー」や ATC21S（21世紀型スキルの学びと評価プロジェクト）の「21世紀型スキル」<sup>(2)</sup>に代表されるような新しい資質・能力観が各国の教育改革に大きな影響を与え、本研修の主な対象国である東南アジアの教育課程においても、新しい資質・能力の育成が目標として示されてきた（国際交流基金日本語国際センター 2015）。

白井 (2020) によると、2015年前後、OECD は目指すべき目標の変革期を迎え、GDP (国内総生産) などの経済指標を高めるだけの「経済的成長」から、貧困層や生態系など社会全体に目を向け、究極的に人々が心身共に幸せな状態 (ウェルビーイング) を作り出す「包括的な成長」へと目標が変わってきた。これを背景として、“OECD Future of Education and Skills 2030” (以下、Education 2030) が立ち上げられ、2030年のより VUCA な時代 (予測困難で不確実、複雑で曖昧な時代) に向けて必要となるコンピテンシーが改めて整理、定義された。また、コンピテンシーをどう育成できるのかが議論され、コンピテンシーを身につけていく先にある目標として「ウェルビーイング」<sup>③</sup>という考えが示された。従来のコンピテンシーの議論が変わりゆく社会に対応するために教育はどう対応していくべきかという、ともするとやや受け身の議論であったのに対して、Education 2030では社会としてのウェルビーイングをゴールとして共有したうえで、「私たちが実現したい未来 (The Future We Want)」、つまり、一人一人が実現したい未来を描き、その実現に向けて取り組むべきという能動的な姿勢への転換がなされた (白井 2020)。

## 2.2 本研修のコースデザインの方針

### 2.2.1 本研修で育みたいコンピテンシー

2.1で述べたような教育の潮流を受け、本研修では「ウェルビーイング」をテーマに掲げ、「自分だけでなく社会全体、現時点のみならず将来的にも望ましい状態が維持されること」と定義し、研修参加者 (以下、参加者) も理解できるよう「自分もみんなも 今も未来も しあわせな世界」として提示した。このような世界をゴールとして共有し、一人一人が実現したい未来を思い描く力を育める研修を目指して、表1に示す4点を本研修で強化したいコンピテンシーとして独自に定めた。

表1 本研修で強化したいコンピテンシー

(A) 多様な文化や考えを理解し、尊重する力	(B) 自分事として捉え、多角的な視点で考える力
(C) 互いの良さを認め合い、協働して目標を達成する力	(D) 自らの行動・考えを振り返り、次に生かす力

この4点は、Education 2030で示されているコンピテンシーを参照したうえで、各国・地域の中等教育段階の外国語教育のカリキュラムで示されているコンピテンシーを参考に、海外で日本語を学ぶ高校生が多様な背景を持つ同世代の仲間と交流する中で育めるコンピテンシーを考えて、定めたものである。

### 2.2.2 コンピテンシーを育む方法

関西センターで行われてきた研修のコースデザインの柱である体験交流活動は、「教室での準備」→「外での活動」→「教室でのまとめ」という流れで行われ、日本語を使うとともに、

活動を通じて日本を理解することができるようデザインされている。特に、日本文化社会の理解を深めるためには、「ガイド」（既有知識の確認、仮説設定）→「活動」（仮説検証）→「教室でのまとめ」（振り返り、新たなスキーマ構築）というサイクルをスパイラルで実施することが提唱され、体験交流活動の利点として「学習者の動機づけが強くなり、主体的な学びが可能となる」点や「日本の文化・社会についての各自の認識が再構築され、理解が深まる」点などが挙げられている（熊野ほか 2009）。

一方、Education 2030では、コンピテンシーを育んでいくのに必要なプロセスとして、「Anticipation（見通し）－Action（行動）－Reflection（振り返り）」（以下、AAR サイクル）が提唱され、これは「学習者が継続的に思考を改善したり、意図的かつ責任ある形で行動することができるような反復的な学習プロセス」と説明されている（白井 2020：168）。本研修ではコンピテンシーを育む方法として、体験交流活動と AAR サイクルの学習のプロセスを重視し、「準備（調べる、予想する、計画する）」→「行動（探索する、観察する、気づく）」→「省察（振り返る、考える、共有する）」のプロセスを繰り返し行うこととした。

### 3. 研修の概要

本研修の対象者は日本語パートナーズが派遣されている中等教育機関で日本語を学ぶ高校生であることから、「日本語パートナーズ派遣事業カウンターパート学習者訪日研修（高校生）」（以下、CP 高校生研修）という名称のもと、今後10年にわたり年に1回実施される予定である。初回の2024年度は10月15日～30日（16日間）に、参加者26名で実施した（表2）<sup>(4)</sup>。

表2 2024年度に実施した CP 高校生研修の参加者

国・地域	インドネシア7名、タイ6名、台湾3名、ベトナム3名、フィリピン2名、マレーシア3名、ラオス2名 ※タイは2校から3名ずつ、フィリピンとラオスは同じ高校から参加。他は異なる高校から1名ずつ参加。
参加条件	ア. 対象となる国・地域の高等学校で、日本語を学習している高校生 イ. 日本語能力試験 N5、または JF 日本語教育スタンダード（以下、JFS）における A1 レベル以上の運用能力を有する者
学年	高校3年生11名、高校2年生11名、高校1年生4名
日本語力	日本語能力試験 N2 1名、N3 5名、N4 2名、N5 5名、未受験13名

#### 3.1 目標

2章で述べたコースデザインの方針にもとづき、本研修の目標は（1）日本の文化社会、及び自文化への理解を深める、（2）同世代の仲間、日本の人々と交流する、（3）相互理解のためのコミュニケーション能力を高める、（4）ウェルビーイングな世界を想像して自分が実現したい未来を思い描く、の4点とした。

### 3.2 活動・スケジュール

目標4（ウェルビーイングな世界を想像して自分が実現したい未来を思い描く）をゴールに、研修の前半では自分自身に目を向け、他者との交流を通して自分を知ることを大切にしたい。そして、様々な活動を通して仲間を知り、町で暮らす人に目を向け、徐々に視野を広げながら、社会にも目を向けることで、町づくりやそこで暮らす人の幸せに思いを巡らせた。また、その視点をもったうえで、改めて自分の住む町のことを考え、日本の文化社会や自文化への理解を深める活動を行った。研修の後半は、同世代の仲間や日本の人々との交流や協働を通して、さらに相互理解を深める活動を取り入れた。研修の最後には、研修での経験を振り返り、今の自分やみんな、そのみんなが暮らす町を思い出したうえで、未来に目を向け、10年後どんな社会で、どう生きていきたいかを考える活動を取り入れた。表3が研修のスケジュール、表4が各活動と本研修で強化したいコンピテンシーの関係を表したものである。

表3 CP 高校生研修のスケジュール

		午前 9:00-11:50	昼休み	午後 13:20-15:30	宿泊先	
前半	1日目	来日			関西センター	
	2日目	開講式・オリエンテーション		アイスブレイク ウェルビーイングって何？		
	3日目	地域オリエンテーリング・準備		地域オリエンテーリング・行動（探索）		
	4日目	地域オリエンテーリング・振り返り	研修旅行・準備	研修旅行・準備		
	5日目	研修旅行			広島	
	6日目	広島（平和記念公園・平和記念資料館・厳島神社訪問、お好み焼き体験）			京都	
	7日目	京都（金閣寺・寺地町・錦市場・東映太秦映画村訪問、友禅染体験）			関西センター	
	8日目	研修旅行・振り返り				
	9日目	発表会1・準備	発表会1「ウェルビーイングなまち」	自由行動		
後半	10日目	高校訪問・ホームステイ・高校生との交流会・準備		文化体験	ホームステイ	
	11日目	交流会・準備	高校訪問		関西センター	
	12日目	ホームステイ（夜、日本の高校生と関西センターへ移動）				
	13日目	日本の高校生との交流会（各国・地域の挨拶・遊び・お菓子、協働活動、発表会、懇親会）				
	14日目	高校訪問・ホームステイ振り返り	学習サイト紹介	研修全体の振り返り		発表会2・準備
	15日目	発表会2・準備	発表会2「ウェルビーイングな未来に向けて」	帰国準備		修了式・送会
	16日目	帰国			-	

表4 各活動と本研修で強化したいコンピテンシーの関係

	A 多様な文化や考えを理解し、尊重する力	B 自分事として捉え、多角的な視点で考える力	C 互いの良さを認め合い、協働して目標を達成する力	D 自らの行動・考えを振り返り、次に生かす力
「ウェルビーイングって何？」	●			
地域オリエンテーリング	●		●	
広島・京都研修旅行	●		●	
発表会1「ウェルビーイングなまち」	●	●		
日本の高校生との交流	●		●	
研修のふりかえり、発表会2「ウェルビーイングな未来に向けて」		●		●

### 3.3 Aレベルの参加者を対象に活動を行う工夫

参加条件を日本語能力試験 N5 以上、または JFS の A1 レベルの運用能力を有する者としているため、教材には視覚資料を多用し、表記ルールは台湾の参加者を考慮して日常生活や学校生活でよく見る漢字は漢字で表記し、ルビをつけた。また、A2 レベル以上の指示文等には英語を併記した。産出活動ではアウトプットする際に必要な表現や発表のパターンを提示し、必要に応じて語彙リストを配布し、話すことや視覚資料を準備してから、発表ややりとりを行う流れとした。また、各活動のグループ分けは日本語使用の必然性や仲間との交流促進を目的

に基本的には日本語能力や特技、国・地域を混合で編成した。日本語の熟達度が A レベルであっても、研修の各活動を通しての共通体験があることが、グループ活動の支えとなると考えた。

### 3.4 評価

評価はポートフォリオ評価を採用した。ポートフォリオ評価とした理由は、参加者が自分の日本語の熟達度を評価したり体験を記録したりすることで学習に対する動機づけを高め、日本語能力だけでなく、教室の中や外で学んださまざまな知識や技能の学習成果の評価も行うことができる点を期待したからである。ポートフォリオの構成は、JFS で提案されている①評価表、②言語的・文化的体験の記録、③学習の成果のうち、①と②を 1 冊にまとめ、「私の日本日記」と名付けた (図1)。「私の日本日記」は、研修初日にコース目標を確認するとともに表紙に今の自分を描く時間を、研修期間中は各活動の振り返りの授業で記入する時間を、研修最終日には目標が達成できたかどうかの自己評価を行う時間を設け、記入時の言語は日本語を推奨するが、自分自身の気持ちや考えを表現することを重視し、母語やイラストの使用もよいこととした。また、帰国後には研修中の日本での経験・行動・感情などを振り返って、その意味を深く考えるものとして、帰国後のレポートを課し、①クラスメイトに研修の経験を話した際、どのような反応があったか、②研修での経験がこれからの日本語学習や進路にどのように役立つかという 2 つのテーマについてのレポートの提出を求めた。レポートを書く際の使用言語は日本語か英語とし、翻訳ツールなどの使用に制限は設けなかった。

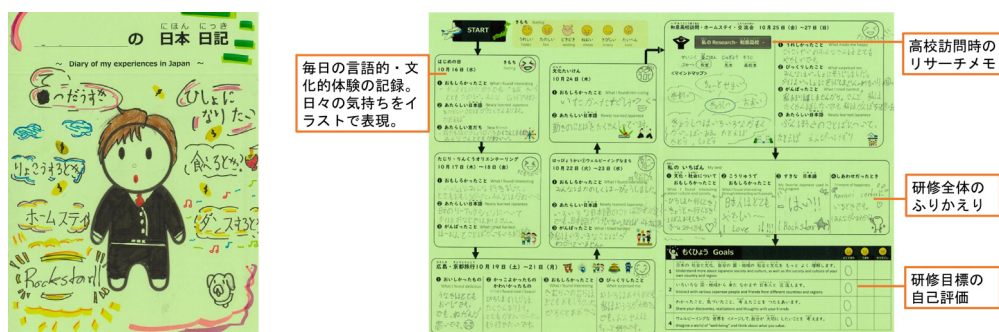


図1 ポートフォリオ「私の日本日記」(左：表紙、右：中身)

## 4. 各活動の内容

本章では研修日程に沿って、各活動の目標・狙い・流れについて具体的に述べる。

### 4.1 「ウェルビーイングって何？」(ウェルビーイングの導入)

開講式、コースオリエンテーション、アイスブレイクに続いて行ったのが「ウェルビーイングって何？」という授業である。「ウェルビーイング」という用語に初めて触れる参加者もいることから、本活動はウェルビーイングの意味を知ることと、自身にとってのウェルビーイ

ングとは何かを考えることを目標にしている。多様な文化や考えを理解し、尊重する力の前提となるのが自身のアイデンティティであり、この活動を通して自分自身について再認識することを狙いとした。

授業はウェルビーイングの導入から始め、英語の「Well」と「Being」やイラストから推測し、講師とのやり取りを通して現時点のみならず将来的にも望ましい状態が維持されることが重要であることを確認した。その後、現時点での自身のウェルビーイングとは何かを振り返って「私の日本日記」の表紙にイラストと文字で描き、それをグループで紹介し合うことを通して、お互いを知る機会とした。最後に、NHK E テレのSDGs番組のテーマソング「あおきいろ」のイラスト版ミュージックビデオ<sup>6)</sup>を見てウェルビーイングな世界を具体的に想像した。

#### 4.2 地域オリエンテーリング (田尻町・りんくうタウンオリエンテーリング)

地域オリエンテーリングは、関西センター周辺をグループで散策する中で発見したことや気づいたことを写真や文字を使って地図にまとめ、日本語で発表することを目標としている。参加者の多くは初来日で、保護者から離れて生活するのも初めてであり、本活動が最初の体験交流活動となる。そのため、心的負担が低い身近な場所から活動を始めることとし、文化背景が異なるグループメンバーと協働する力を養うことと、本研修の学びのプロセス「準備→行動→省察」を通して日本の文化社会について理解を深めることを狙いとした。

活動の流れは、準備の時間に、この活動で一緒に行動するグループに分かれ、チームビルディングと日本や大阪に関する既有知識を活性化し、情報をインプットすることを目的としてチーム対抗「日本・大阪クイズ」を行った。その後、タスクを説明し、行き先はくじ引きで決定した。町でのタスクは、①決められた行き先に何があったか／そこで何ができるか、②昼食を食べた店やおすすめの料理、③決められた行き先以外のおすすめ店や物を見つけること、④駅前の観覧車に乗って上空から町を観察することの4つで、各タスクの写真をPadlet<sup>6)</sup>に投稿し、情報はメモしておくよう参加者に伝えた。

翌日の振り返りでは、グループで1枚の大きな地図を作成した(図2)。その後、発表例を参考にグループで発表の練習をした後、グループ間での発表を行った。教室の前で全員に対して行う発表ではなく、グループ間での発表としたのは、これが本研修における最初の発表の機会となるため、緊張や不安を考慮したからである。また、どのグループも2回ずつ発表することとし、1回目の反省を活かして2回目を行う



図2 作成した地図

チャンスがあることで、日本語による発表に自信が持てるようにした。発表後に自らの行動を振り返り、活動の中で覚えた日本語や頑張ったことを「私の日本日記」に書いた。

### 4.3 広島・京都研修旅行

広島・京都研修旅行は、町や人の行動について観察することを通して日本の文化社会への理解を深めることと、グループで協力して行動することを目標としている。様々な背景を持つ他者と協働する力が養われるよう、新たにグループを編成した。

活動の流れは、準備の時間に、グループメンバーと安心して活動できるように、チームビルディングとして「共通点探し」で自己紹介を行うところから始めた。そして、グループで広島・京都の町のイメージを話した後、広島と京都に関する既有知識の活性化とインプットを目的として、広島と京都の観光地、食べ物、お土産のカードを分類するアクティビティを行い



図3 研修旅行準備の様子

(図3)、メンバーそれぞれの既有知識を持ち寄り、時に類推しながら広島と京都の情報を整理した。次に、旅程や訪問地の歴史、文化的背景について学んだ後、グループタスクと個人タスクの説明をした。グループタスクはメンバーで相談する必要があるものとし、①京都の昼食はメンバーで相談して場所を決め、昼食の様子を Padlet に投稿することと、②京都東映太秦映画村で日本の昔の生活を知り、映画村で昔の人になったつもりでポーズをして写真を撮り、写真のタイトルを決めて Padlet に投稿することとした。個人タスクについては4.4で詳述する。また、授業の最後に、広島で訪問する平和記念公園と関連して折り鶴を折り、平和を願うポスターを作成した。

振り返りの授業では、広島と京都の町のイメージについて訪問前と後では変化があったかを話した後、旅行先で買ったお土産を参加者同士で紹介しあった。また、グループタスクの写真を教室の前に映し、講師とのやりとりを通して紹介した。最後に、「私の日本日記」に研修旅行中の「おいしかったもの、かっこよかったもの／かわいかったもの、おもしろかったこと、びっくりしたこと」について気づきを書き、写真を見せながらグループで話す活動を行った。

### 4.4 発表会1「ウェルビーイングなまち」

研修前半のまとめとして、「ウェルビーイングなまちー自分もみんなも しあわせなまちー」というテーマで、国・地域ごとのグループで発表する機会を設けた。本発表会は、自身も含め誰もが健やかに安心して幸せに暮らすための物や人の行動について、広島・京都研修旅行で観察したことに加え、自身が住む町を振り返り、既にある物と将来的にあるとよい物について考え、発表することを目標にしている。この活動では、好奇心を持って社会を観察する態度、グループメンバーと意見交換する中で自分とは異なる人の意見やアイデアを共感や敬意を持って受け止める力、そして、社会の事象を自分事として捉えて多角的な視点から批判的に考える力を養うことを狙いとしている。

活動の流れは、広島・京都研修旅行の準備の時間の中で、発表会のテーマを説明し、「自分

もみんなも しあわせなまち」における「みんな」とは誰かについて考える時間を作り、「みんな」とは家族や友人、地域の人、更には国や世界、地球まで広がりのあるものだと理解したうえで、改めて「あおきいろ」のビデオを見て、様々な文化背景の人、動物や自然など地球環境についても意識を向けた。そして、現時点で自身がイメージする「ウェルビーイングなまち」についてイラストで描き、絵を見せながら各々がイメージする社会について話した(図4)。その後、広島・京都研修旅行での個人タスクとして、ウェルビーイングに繋がる町の物や人の行動について観察するときのポイント「①人にやさしい、②環境にやさしい、③町がもっと好きになる、④歴史を大切にしている」の4点を提示し、発見した物を写真に撮り、Padletに投稿することを説明した。

研修旅行後の振り返りでは、まず発表準備として、広島・京都で各々が見つけた物や行動をグループで共有しながら4つのポイントで分類した(図5)。その後、自分の国・地域にあるウェルビーイングな物や行動について4つのポイントから改めて考えて意見を整理し、自国・地域についてよりよい社会にするために何が必要かを批判的に考えてアイデアを出し合った。出たアイデアの中からグループで相談してクラスメイトに紹介したいものを選んだ。この活動は、自分の考えとそれを裏付ける理由を共有する抽象度の高い活動であることから、紹介したいものを決める時など日本語で伝えることが難しい場合は、母語使用も可能とした。グループでの話し合いの後、日本語での発表に向けてスクリプトの例を参考に話す順番や内容を決め、スライドを作成した。発表会は中規模の教室で行った。発表後には旅行に行く前に描いた「ウェルビーイングなまち」のイラストをもう一度見返し、以前考えたことは十分だったか、過去の自分自身の考えを振り返り、イラストを更新した。最後に、発表における自らの行動を振り返り、「私の日本日記」に書いた。

#### 4.5 日本の高校生との交流(高校訪問、ホームステイ、交流会)

日本の高校生との交流は、大阪府下の公立高校1校の協力を得て、3日間のプログラムとして実施するものである。1日目は高校を訪問して授業見学や交流活動、部活見学を行い、その日の夕方からホストファミリー宅へ行く。2日目はホストファミリーと過ごし、夜にホストファ



図4 イラストを見せながら話す活動



図5 旅行先で見つけたものの分類作業



図6 発表会の様子

ミリーの高校生（以下、バディ高校生）と共に関西センターに戻り、共に関西センターに泊まる。3日目は関西センターで協働活動を行う。交流を通して同世代の日本の高校生やその家族の生活や考えに触れ、日本の文化社会、及び自文化への理解を深めることを目標としている。日本の高校生との日本語での協働活動を通して、お互いの良さを認める姿勢、創造性を発揮しながら物事を進める力を養うことを狙いとしている。

活動の流れは、準備の時間に、日本の高校生活についてのデータ等を見て既有知識の活性化とインプットを行った後、高校訪問時のタスクとして「私の日本日記」内の「私の Research」欄にある選択肢（制服・授業・部活等）から一つ選んで、高校訪問時に重点的に観察する点を選ぶよう伝えた。そして、高校訪問の交流活動で行う Show & Tell 形式の自己紹介の練習を行った<sup>(7)</sup>。次に、ホストファミリーの情報を伝え、ホームステイで役立つ日本語の練習をし、ホームステイ中のタスクとしてホストファミリーへのインタビューを課した。その後、2日目の夜からバディ高校生を関西センターに迎えるにあたり、ウェルカムボード作成や挨拶、参加者が国・地域から持参したお菓子の紹介カードの作成や遊びの紹介の準備を行った。

高校訪問とホームステイを終え、2日目の夜にバディ高校生と関西センターに戻ってきた際には、ウェルカムボードと挨拶で歓迎の気持ちを伝えた後、アイスブレイクを行い、夜はバディ高校生と自由に過ごす時間とした。3日目の協働活動はバディ高校生にとっても、多様な国・地域の文化や言語への興味関心を高め、異なる背景を持つ同世代の仲間と協働する力を養う機会となるよう多様な言語や文化に触れられる活動とした。具体的には、はじめにアイスブレイクとして各国・地域のことばで朝の挨拶をした後、参加者が自国・地域の遊びを紹介して共に体験した。その後、グループに分かれて共通点探しの自己紹介をした後、グループ活動で使えるリアクションの表現を関西弁や若者ことば、自国・地域の言語で教え合う活動をした。その後の休憩時間は長めにとり、国・地域のお菓子でバディ高校生をもてなした。そして、メインの協働活動である「砂絵アート」作りに入った。砂絵アートは、テーマから連想するものを色砂を使ってイラストや文字で表現し、グループで順にリレー形式で描き足し、一つの作品として作り上げる活動である<sup>(8)</sup>。本活動におけるテーマは「しあわせ」とし、自身の幸せについて個人でマインドマップを書いてグループで共有した後、描く順番を決め、砂絵アート作りを行った（図7）。完成後、作品のタイトルを決め、発表会に向け、「しあわせ」から何をイメージして作品を作ったのかグループで紹介する準備をした。発表会は、ホストファミリーを迎えて総勢約100名の聴衆に向け、ホールで行った（図8）。交流会の最後は、参加者の代表が3日間の



図7 砂絵アート作り



図8 発表会の様子

お礼を述べて締めくくった。

3日間の交流の振り返りとして、高校訪問時に観察したことを「私の日本日記」の「私のResearch」にマインドマップで書き、自国・地域や来日前のイメージと比較して気がついたことと、ホームステイの経験やインタビュー内容についてグループで話した。最後に3日間を振り返り、嬉しかったことや頑張ったことなど気づきを「私の日本日記」に書いた。

#### 4.6 研修のふりかえり、発表会2「ウェルビーイングな未来に向けて」

発表会2は「ウェルビーイングな未来に向けて—10年後の私へ—」というテーマで、研修の集大成として位置付けて行った。本発表会は、研修中の様々な活動を通して一人一人が持った自分にとってのウェルビーイングな世界のイメージから、生きたい未来を思い描いて、自分が大切にしていきたいことを考え、発表することを目標としている。この活動を通して、これまでの人生や研修での自身のどの考えや行動がウェルビーイングの実現に繋がるものなのかを批判的かつ省察的に振り返る力と、自身の未来に向けて責任ある行動をとるために自己調整、自己管理していく力を養うことを狙いとしている。

活動の流れは、まず2週間の研修で何をしたかを全体で振り返った後、個人でスマートフォンの写真を辿り、「私の日本日記」に「文化社会でおもしろかったこと、交流でおもしろかったこと、好きな日本語」について書き、グループに共有したいことを一つ選んで写真を見せながら話した。そして、「日本で幸せだった時間」についてマインドマップを書き、グループで共有した。その後、「ウェルビーイング」の「自分もみんなも 今も未来も しあわせな世界」を復習し、「未来」に注目して10年後にタイムスリップしたと仮定したうえで、その世界で自分は何をしているか、どう生きているかをイメージさせ、10年後も大切にしていきたいことを考えて手紙にした(図9)。そして、手紙の内容に関する写真を数枚選び、発表のスライドを準備した。発表会は関西センターのスタッフを聴衆に迎え、グループごとにホールの前に立ち、全員で挨拶した後、一人ずつ手紙を読む形式で行った。発表会の後、「私の日本日記」にある研修目標について自己評価をし、研修初日に「私の日本日記」の表紙に描いた自身のウェルビーイングにキーワードやイラストを書き足し、更新した。

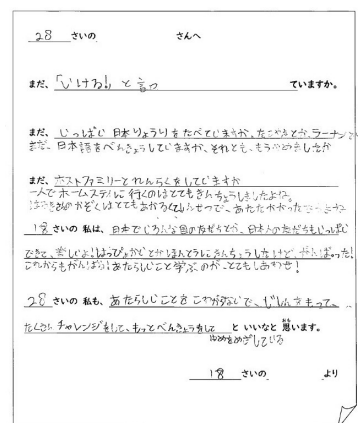


図9 10年後の自分宛てに書いた手紙

### 5. 参加者の声

本章では、参加者が自身の学びをどう捉えたか、研修終了時に実施したコースアンケート、及び帰国後のレポートから紹介する。

まず、本研修全体に対する5段階での満足度評価の結果は「とても満足」88.0%、「まあ満足」12.0%であった。次に、4つの研修目標に対する参加者の自己評価は表5の通りであり、ほぼ全ての参加者が4つの目標の達成度について「とてもそう思う」「まあそう思う」と肯定的に捉えており、コースの活動が4つの目標を達成するために効果があったことがわかる。なお、目標1、3、4は「どちらとも言えない」と1名ずつ回答しているが、コメントはなかった。

表5 研修目標に対する参加者の自己評価

設問	とても そう思う	まあ そう思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
1 日本文化社会、自分の国・地域の文化社会をもっとよく理解できたか	24人 (92.3%)	1人 (3.8%)	1人 (3.8%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)
2 いろいろな国・地域から来たなかまや日本人々と交流することができたか	17人 (65.4%)	9人 (34.6%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)
3 わかったこと、気づいたこと、考えたことを伝え合うことができたか	19人 (73.1%)	6人 (23.1%)	1人 (3.8%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)
4 ウェルビーイングな世界をイメージして、自分が大切にしたいことを考えることができたか	22人 (84.6%)	3人 (11.5%)	1人 (3.8%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)

研修目標4に関し、高校生にとって「ウェルビーイング」という抽象的な概念を自分自身と結びつけて考えるのは難しいようにも思えるが、帰国後のレポートでは多くの言及が見られた。ある参加者は「ウェルビーイングについて多くのことを学びました。(中略) 町を歩く中で目にした自然と調和した美しい景観やリラックスできる公園は、日常生活の中でも心の安らぎを見つける大切さを教えてくれました」と書いており、帰国後、日常において当たり前存在する場所が自身が安心して暮らすために大切なものであると再認識したようで、今後、地域社会に資する行動の意識が芽生えたことが窺える。また、「ウェルビーイングとは、私もみんなも幸せであることを意味します。(中略) 将来的には、困っている人々を助けるためのチャリティーやボランティアプロジェクトにも参加する予定です。」のように、地域社会に暮らす他者に目を向け、自分自身は何ができるのか、どう関わっていきたいのかを考えられた参加者もいた。

また、本研修で目指したコンピテンシーの育成についても、帰国後のレポートにおいて多数の言及がなされた。「常に団結力を持ち、チームとして働きます。お互いの異なる考えを受け入れ、理解します。相手の考えを聞き、そして同意することを学びました。」というように、共感や敬意を持って聞く態度が養われたことや、「チームで協力することや相手にていねいに話すことが大切だと知りました。」というように、協働する力や他者を思いやる態度が育まれたことが窺えた。また、「このプログラムの勉強方法はよかったです。最初にじゅんびをして、グループで協力して、そして、もう一度じゅんびをして、最後は発表をしました。このプロセスはよかったです。将来、私にとってとても役に立つと思います。」のように自身の学びの過程を省察的に捉え、今後の学びに生きる力が養われた参加者もいたようであった。

## 6. まとめにかえて

本稿では、「次世代の交流促進と人材育成」を目指し、「ウェルビーイング」をテーマに実施した CP 高校生研修の取り組みについて報告した。コンピテンシーは短期間で習得できるものではなく、時間をかけて徐々に形成されていくものである。多感な時期にある高校生たちが本研修で得た経験や学びを、その後どのように活かして VUCA な時代を生き抜いているのかについては縦断的な視点からの分析も必要となってくるだろう。

また、21世紀に入って四半世紀が過ぎ、世界はかつてないスピードで変化を続けている。CP 高校生研修は今後10年間継続される予定であるが、こうした時代の変化に対応する柔軟な調整が不可欠である。社会と個人のウェルビーイングを描きながら、その時代にふさわしいコンピテンシーを育む研修となるよう引き続き広い視野を持って研修内容の検討を重ねていきたい。

### 〔注〕

- ① 本事業の目標は、事業を通じて①日 ASEAN 間における将来にわたる強固な信頼関係の構築、②多層的な人的ネットワークの強化、③共通課題解決に向けた協働、④懸け橋となる次世代人材の育成、⑤多文化共生社会の発展への貢献であると述べられている（国際交流基金「次世代共創パートナーシップ－文化の WA2.0－」）。
- ② 21世紀の社会を生き抜く力について、「キー・コンピテンシー」では核心に「思慮深さ・反省」をおき、「異質な人々から構成される集団で相互にかかわり合う力」「自律的に行動する力」「道具を相互作用的に用いる力」の3つのカテゴリーに、「21世紀型スキル」では「思考の方法」「働く方法」「働くためのツール」「世の中で生きる」の4つのカテゴリーに分類している（国際交流基金日本語国際センター 2015）。
- ③ 「ウェルビーイング」について、白井（2020：58）では、「特に個人だけではなく、社会としてのウェルビーイングの実現など、より広い意味で用いられている」と述べられている。
- ④ 台湾以外の6か国・地域からは安全管理の目的で JF 海外拠点のスタッフ、または教師各1名が引率した。
- ⑤ 「あおきいろ」のイラスト版ミュージックビデオは<https://www.youtube.com/watch?v=prxNzIy3YpU>（2025年8月9日）を参照。
- ⑥ Padlet は教育現場に向けて作られたオンライン掲示板アプリで、テキストや画像等の投稿が可能である。
- ⑦ 来日前に、写真やイラストで自分（趣味、家族、学校、町等）を紹介するコラージュ作成を課している。
- ⑧ 「砂絵アート」の活動の流れは今井ほか（2009）に詳しい。

### 〔参考文献〕

- 今井寿枝・品川直美・野畑理佳（2009）「夏休み子どもワークショップ「世界中の仲間といっしょに」－関西国際センター研修参加者と小学生を対象とした国際理解ワークショップの実践記録－」『国際交流基金日本語教育紀要』5、181-187
- 白井俊（2020）『OECD Education2030プロジェクトが描く教育の未来－エージェンシー、資質・能力とカリキュラム－』、ミネルヴァ書房
- 熊野七絵・品川直美・羽太園・田中哲哉・矢澤理子・西野藍（2009）「短期訪日コースのための教材開発－『日本語ドキドキ体験交流活動集』－」『国際交流基金日本語教育紀要』5、135-149
- 国際交流基金日本語国際センター（2015）『21世紀の人材育成をめざす東南アジア5か国の中等教育における日本語教育－各国教育文書から見える教育のパラダイムシフト－』、国際交流基金日本語国際センター
- 国際交流基金「次世代共創パートナーシップ－文化の WA2.0－」  
 <<https://www.jpff.go.jp/j/project/special/bunkanowa2/index.html>>（2025年8月9日）

■執筆者

武 田 素 子 国際交流基金関西国際センター 日本語教育専門員

和 栗 夏 海 国際交流基金関西国際センター 日本語教育専門員